

書く私

—王安憶『紀実和虚構——創造世界方法之一種』をめぐると考察—

藤重 典子

1、ルービック・キューブ

王安憶『紀実和虚構——創造世界方法之一種』は王安憶が1992年6月に完成したポスト天安門事件の時代の小説である。

この難解な書物をあっさりと迷宮入りにしてしまうことには、私はやぶさかではないが、ややためられるその一因は、作者の「跋」の、それこそ饒舌きわまる必死の解説にある。同時期に書かれた力作『米尼』が編集部からの「退稿」の憂き目にあったというのが王蒙情報であるが、硬直した既成文壇からの拒絶(“枪毙”=銃殺する、ポツにする)は勲章であるとはいえ、それに注いだ心血を考えると勘定の合わない話であろう。

ゆえにこの「跋」は、新文体に直面してとまどい、保守のくずかごに放り込むことで片づけられる作品をあらかじめ救っておく一種の理論武装とでもみなすことができよう。作品の題名から始めて、十分に挑発的である。それは文学をめぐる古典的論議——これは作者が自ら体験したことを描く「紀実」なのか、それとも全くの架空の物語「虚構」であるかという堂々めぐりの議論——の分岐点をそのまま突きつけ、それは世界を創造する「方法」の一つであるという副題で煙に巻く。

読者としてはむしろ、作品のよき理解者となり、作家の寵愛を受ける愛読者でいたいという誘惑もあろう。しかし相手は何しろ「生き馬の目を抜く」人種である。こちら「生き肝」なり「度肝」を抜かれることなく、かつ睡魔の誘惑にあらがって作品を読み終えるには、作品と対決する一つの心構えが必要であろう。

さて作者が第一に措定しているのは、「武器としての虚構」である。

「後に私は思うようになったのだが、私が作家になったのは、実際は一種の権利を手に入れたいからで、それはすなわち虚構の権利なのである。：后来；我就想，我做作家其实是要获得一种权利，那就是虚构的权利。」(『紀実和虚構——創造世界方法之一種』跋、人民文学出版社1993年6月P. 464、以下引用は同書による)

作者に虚構の権利があるなら、読者には本を閉じる権利の他に、誤読権や歪読権が与えられてしかるべきであろう。ある哲学者の言によれば、人間は自分が消化できる一片しか対象から噛み取ることができない存在であり、それは彼が向き合うことを拒絶した部分に、彼の存在にとっての「死」が含まれているからである(アーネス

ト・ベッカー『死の拒絶』)。

読者にとっての「死」とは、対象を論じる足場を完全に失ってしまう、作品に飲み込まれてしまうことであろう。一つの聡明な選択は「これは駄作である」と作品に死刑宣告を下すことであるが、作品世界から自らを救う代償に、作品の論評者としての自分を捨てるにはしのびない。

さてこの作品では時間と歴史をめぐる、ある画期的な新しい試みがなされているようである。それは虚構の産出にとどまらない、虚構空間そのものにさらに創造性を持たせようとする試みであろう。作者はそれを一つの図として表現した。

私は一枚の白紙に線を引くことから始めよう。

「最初に述べたように、彼女は座標を取る方法で、縦と横の二つの空間を割り出し、虚構をこの相離反し相交錯する二次元の空間で展開させた。：如最先所说，她以坐标的方法归纳纵和横两个空间，让虚构在此相离又相交的两维之中展开。」P. 465

白紙にはX軸とY軸がクロスし、ここが虚構の展開する二次元の平面空間になる。

「私は交錯という公式で、この二つの虚構世界を交互に叙述した。：我以交叉的形式轮番叙述这两个虚构世界。」P. 465

この複数の時間を交錯させる方法は、おそらく王安憶の母親である茹志鵬の『つなぎちがえの物語(剪辑错了的故事)79年2月』にならったものであろう。¹

この時間交錯は、時間は異にしていながら状況が酷似する空間を近接させ、型にはめこませることで全体図を描いていく。それは言うならば、ジグソーパズルの方法である。

「私は私の歴史を虚構し、これを私の縦の関係と見なした……私はさらに私の社会を虚構し、これを私の横の関係と見なした。：我虚构我的历史，将此视作我的纵向关系……我还虚构我的社会，将此视作我的横向关系。」P. 465

ここまでは、X軸で社会的広がりを示し、Y軸で時間的流れを示せば、図として理解することも可能であった。しかしこの作品はそれからさらに世界を広げ、ジグソーパズルの次元をはみ出してしてしまうのである。

「私はやはりこの都市が私に教えた帰納的方式を採用し、社会関係を数種に絞った。：我还是采取这城市教给我的归纳的方式，将社会关系归为几种。」P. 465

彼女が描き出す社会関係は、彼女の家を往来する地域社会の人々、そして恋愛と文学創作に絞られていく。

こうして取捨選択された虚構を、作者は一枚の絵画にたとえている。

「後に私はあの縦の関係を一本の木のように設定し、あの横の関係を周囲の風波のように、一つ一つ波紋を広げさせた。：后来我设计那纵向的关系如一棵树，那横向

的关系如周围的水波，一圈一圈荡漾开来。」P. 465

Y軸はここで一本の木に例えられるわけであるが、作者がさらに、「私が虚構を描くときにはしばしばある奇妙なアンビヴァレンスがあって、抽象的虚構であればあるほど私は具体的風景を基礎とすることを要求し、それはある弁証法的論理にかなうもので、木の根が深く張れば張るほど木が高くそびえ、枝葉が茂るようなものである。：我在虚构的时候往往有一种奇妙的逆反心理，越是抽象的虚构，我越是要求有具体的景观作基础。我想这是一个辩证的道理，就像是树的根扎得越深，树身就越长得高，并且枝繁叶茂」(P. 465)と述べるに至って、この図は崩壊する。

作者の説明によれば、Y軸が歴史的時間を示すなら、Y軸は未来に向かって伸びて行かなければならず、さらに「Y軸から広がる波紋」の位置はZ軸の想定なしには不可能である。また、外部世界からランダムに物語時間に切り込む王安憶の叙述方法は、その作者がひかえる別の場所を想定しなければならないであろう。

物語の「序」のわずか最初の二ページを見ても、自分を示すことばは“我们”“他们”“我们家的我”“孩子我”“这个孩子”“她”と縦横に使い分けられ、物語に流れる時間も作者の幼年時代から現在までの時間、曾外祖母から母までの三代の女の時間、祖先から曾外祖母までの歴史的時間という三つの流れが相交差している。

さて、作者は物語の完成の瞬間を次のように表現している。

「三百余の日夜の中で、私は急にこの二次元の空間がすでにダムのように一つにまとまっていることに気がついた。：在三百多个日日夜夜之中，我陡地发现这两维空间已像大坝似地合拢了。」P. 466

これは物語が本来は立体的なものであり、文字表現という二次元の空間に封じ込めることは、急に外部から「現象として得られた」ことを示している。この立体の最も近いモデルはルービックキューブである。厳密に言うならば、この作品全体が立方体であるルービックキューブをつないで作ったメビウスの輪であり、一章が一つのルービックキューブであるといえよう。このメビウスの輪の接着点も、序と跋の時間的一致である。さらに序の冒頭、「很久以来，我们在上海这城市里，都像是个外来户」と第一章の冒頭、「我们在上海这城市里，就像是外来户」の重複も、序を物語世界に組みこませる接着剤としての役割を果たすという設定なのであろう。¹¹

ルービックキューブの論理も数学の方程式に置き換えられるというが、それは筆者の人文・漢文の頭ではチンプンカンプンの話であるから探求は免除されたい。しかしながら、王安憶の解説にもあったように、文学解釈に数学や物理学の知識も必要になってくる時代は遠くないであろう。

さて、ひとまず物語のイメージの大まかなモデルは得られた。つぎに問題になるのは、キューブとそれをねじり回す作者との関係である。

2、母の秩序

物語の生まれる場所は、「同志の家」に生まれ、革命の後継者として上海の伝統的市民とは隔離されて育った「私」の感じる孤独感である。「同志の家」には母の教育訓話があったが、子どもが驚き目を輝かせる遊びの場が決定的に欠如していた。

彼女は自分の場所を見いだせないという絶望的孤独とあらがっていた自らの少女時代を語る。そして辞書と歴史書をひもとき、母の姓“茹”から“柔”を導き出すことから歴史に切り込んでいく。それはルーツ探索というよりルーツ創作と呼ぶ方がふさわしいものである。

「いま、私は私の家族神話に名をつけることにしよう。その名は柔然である。：現在我決定要为我的家族神话命名了，它的名字就叫柔然。」P. 53

それは学術シンポにおける議長の開会宣言にも似ており、座標がY=0=柔然と取られる瞬間である。さらに作者はその学術会議で柔然を語り論評する文化評論家の仕事も果たし、文字文化の持つ意味も考察する。

「史書が私に告げるところでは、突厥は自分の文字を持つ民族であり、これが我らの祖先柔然と異なる点である。……突厥が蜂起して奴隸主である私の祖先を滅亡させることができたのは、私はこの二つの条件に基づくものと考えている：一つは文字であり、二つめは製鉄技術である。文字は彼らの祖先代々の経験を流失させず、さらに彼らに一種の精神的遺産の構築と保存をさせ、それが彼らが生存し戦闘する目標となった。……一千五百年の後、後代の私がわたしの家族神話を編纂しようとしても、いくら探しても祖先の遺物を見いだすことはできなかつた。：史书告诉我，突厥是有自己文字的民族，这与我祖先柔然族不同。……突厥所以能够崛起，消灭奴隶主我的祖先，我想就是基于这两个条件：一是文字，二是铁工。文字使他们祖祖辈辈的经验不致流失，文字还使他们建设与保存一种精神的财富，作为他们生存与战斗的目标。……一千五百年后，当后代我编写我的家族神话时，我到处找也找不到祖先任何一点遗物。」P. 91

この叙述の学術的魅力は読者に委ねよう。このような口調で王安憶は新たな価値体系の糸を紡いでいくのであるが、この虚構神話を具とするサンドイッチのパン生地は、書齋で叙述する「私の歴史」である。作者は虚構世界で袋小路に追いつめられると現実世界に逃げ、現実世界で行きづまるとタイムトンネルを使って虚構世界に

飛躍することで、現実世界と虚構世界をつなぐパイプを一本ずつつないでいく。

彼女を最も強く束縛し規定しようとしたのは「母の秩序」である。ゆえに作品の随所に上海市民としての自分と、それを切り離そうとする母との強い葛藤が見られる。

「すなわち、ある面では私は上海の新市民のこの都市に対する一体感を切り捨てられず、もう一方では、私は子供の母に対する一体感を切り捨てられなかった。：就是说一方面我割舍不了一个上海新市民对这城市的认同；另一方面我割舍不了一个孩子对母亲的认同。」P. 9

それは母との激しい格闘という形式を取るだろう。

「母は私のある成長時期において、私の仮想の敵だった。私は常に彼女に反抗をしていた。彼女が東といえ、私は西と言ひ、彼女が西といえ、私は東に執着した。しかし私は若干の意味のない些末なことでは母親に反抗したが、大事においては、例えばひとりの男の子と一緒に遊ぶかどうかというようなことでは、私は母の意志に逆らえなかった。：母亲在我某一个成长时期里，成为我假想的仇敌，我总是在对她作出反抗。她要我东，我就西；她要我西，我偏偏东。我只能在一些没有意义的小事上反抗，在大事上，比如和那个男孩玩耍，我却不敢违抗母亲的意志。」P. 14

母との一体感から自分自身をもぎとる過程としてこの文章は綴られる。しかし、彼女は母を捨てることはできなかった。孤児として何にもとらわれない母が、革命根拠地を目指して上海を捨てたのだ、と述べられるのである。（上海就是这样被我母亲抛弃了。P. 44）

彼女の両親の秩序との闘いをシンボルするものとして、ユニークなエピソードが英語学習拒絶である。彼女は父母による英語学習の要求を同級生たちからの隔離と受けとった。そこで彼女は徹底した拒絶に出る。教師にはわざと逆らい、何度繰り返しても覚え、かつてにしゃしゃり出て黒板に落書きをしたりと、思いつくままの反抗を試みる。

「私は実は母親が私を救ってくれることを望んでいた。強権で私と英語とのますます深まる敵対を和解させることを望んでいた。：我其实是盼望母亲来解救我，用强权来调解我和英语课越来越深的敌对。」P. 116

抵抗者の希望は、自分のささやかな抵抗が意味を持ち続けるほど、弾圧が普遍性と永続性を持つことであろう。彼女は内心では親が専制的態度にでることを望み、自分が闘っている敵が自分の反抗を打ち砕くほどの強さを持っていることを望む。

しかしその期待は外れてしまうのである。

「私のわがままは一種の周期的な循環発作になっており、外から見るとわけがわからなかっただろう。誰もそれにはある大きな病因、すなわち孤独があることを知らなかった。：我的任性变成一种周期性的循环发作，外人看起来莫名其妙，谁也不知道它有一个大病因，就是孤独。」P. 117

それは自分でも手のつけようのない、狂気に近い発作であった。

ここで王安憶の置かれた状況を、ヨーロッパのフェミニズム理論の引用で論評しておくのも意味のあることだろう。

「たとえば心理学者のフィリス・チュスラーは、その著『女性と狂気』（一九七二）で次のことを主張している。すなわち、アメリカの精神病収容施設に入れられた女性たちとは、それまで窮屈な女らしさの制約に立ち向かって、失敗はしたものの勇ましく反逆したものたちである。この女たちは、“力を求める宿命的な探索の旅に出る”巡礼者であり、その狂気とは性(ジェンダー)規範そのものと、規範逸脱に貼りつけられたレットテルである。つまり、『女』でありたくないと望み、敢然と『女』をやめようとしたことと並んで“『女』であること”に課せられた罰なのである(下線原著者)。

……ショウシャナ・フェルマンが指摘しているように、狂気とは、「反逆のまったく対極にあるものである。自己の文化の条件に、自己確認や抗議の真の手段を奪われたものたちが追いつめられる袋小路である。」

(『心を病む女たち——狂気と英国文化——』序 エレイン・ショーウォーター、朝日出版社 P. 5、P. 6)

王安憶も、「同志の家」の後継者として、そして育ちの良い娘として求められる規範に反逆するものの、一方では母の庇護を否定しきれず、自己確認と抗議の手段を奪われて袋小路に入っていたということができよう。

さて、王安憶は次のような言葉を記述する。

「シャロンは述べた。一人の息子がもしもハーンになりたいなら、まずすべきことは父に背くことである。：社论说：一个儿子倘若要做汗，第一件事就是背叛父亲，」P. 69

一人の娘がもしも文壇の勇者になりたいのなら、まずすべきことは女流作家である母に背くことであつたらう。その方法は、少女時代は反抗であつたが、現在では母の苦難に満ちた歴史もトレースして母を他者としてとらえなおし、それとは別個の自らの神話を枝分かれさせることで母子分離を果たし、自己回復していくプロ

セスであった。

王安憶の真価は、限りなくゼロに近い、枯渇寸前まであらいながら、その抵抗の強さを不意に創造に転じるような力である。彼女の抵抗の激しさは、ねばり強さとセットになっている。ここでは王安憶は、自分の場を見いだすことのできなかつたこの現実世界に、虚構によって自らが安らげる世界を「創造」し遂げている。さらにつけ加えるなら、副題にもあるように、ストーリーよりはむしろこの「方法」が作品の主題と言ってもよい。

ともあれ、それは89年の「確固とした世界観を持たぬがゆえに遊戯精神で身を守った私」(『おじさんの物語』加藤三由紀、『ユリイカ』92年2月)からの一つの脱却、自らを脱構築(ディコンストラクション)する行為であるだろう。

3、虚構の代価

柔然が衰微し、残りの三千名が突厥に捕らえられて長安の青門外で首を切られるという記述で、歴史に関わるキー・ワードとしての母親の姓“茹”の生命は切れる。 $Y=0$ = 柔然という歴史ベクトルは終わりを告げるのであるが、しかしそれならば、現に生きて書き続ける自分の存在証明をどうするのか、それが課題になってくるだろう。

ここで柔然の歴史と自分をつなぐ作業で、彼女が支払った精神的代価であり、同時にこの書の最大の思想的魅力になっているのが、 $Y=0$ の取り直しである紹興の墮民と自分のルーツをつなぐ作業である。

柔然の末代である可能性を示す資料は、かろうじて『南史』にさがしあてた「丁零(北方種族——引用者)に敗れ、さらに小国となって南遷した」という一節だけであった。

ここで私の前に三つの選択肢が差し出される。私は南遷した柔然の部族の後代なのか、それとも魏と外戚関係を結んだ逆臣の後代なのか、それとも最後まで闘い、突厥に併合された奴隷の後代なのか、と。

この時、王安憶の記憶の引き出しが開かれ、曾外祖父の故郷、紹興の墮民が想起される。その起源については多くの説があり、木山英雄の『魯迅の紹興』(岩波書店、90年)でも四つの起源が示されているが、王安憶が取ったのは、木山の挙げる説の最後のもの、「四、明代初め、洪武や永楽帝に反抗した忠臣義士は、みな張士誠や方国珍(共に洪武に敗れた元末の英雄)の部族だったと伝えられるが、その数が多くて誅しきれなかったので寧波紹興一帯に移し、貶めて墮民となすよう命じた」というものである。

罪を得た蒙古貴族の後代でありたいという願いの奥には、根なし草となった民衆が、自らが実は貴種であることを願望する「貴種流離譚」に似たものを読みとれる。

「私は蒙古の末裔になりたい、運命がどうであろうとも、最後には罪人とされて、落ちぶれ墮民となろうとも、私がかまわない。：我愿做蒙古的后代，无论命运如何，最终陷入罪人，沦为墮民，我也不在乎。」P. 138

こうしてチンギス汗が先祖に選ばれた。その代償は柔然の滅亡からチンギス汗の誕生までの六百十年の沈黙に耐え、元の滅亡後の墮民の境遇を忍ぶことである。その代償の大ききゆえに、モンゴルの栄華には思う存分の筆が振るわれた。しかし蒙古起源を証明する資料は何もない。この時に王安憶は母親の容貌さえも援用する。

「私は母の顔つきが紹興の人らしくないことに気づいた……私の母は大きな身体つきで、細長い目は切れあがり、額は偏平で、明らかに蒙古人種である。：我发现我母亲的面容与绍兴人很不相符……而我母亲身材高大，细眼长梢，额头扁平，显然是蒙古人种。」P. 140

これは高島俊男氏が記している1965年に訪日した茹志鵬の印象と一致している。

「頬骨が張って、眉が薄く、鼻が低く、口元のしまったきつい顔立ちで、頭の切れる女だということが一目で分かるが、これがひとたび笑うと、可愛いというよりほかない無邪気で魅力的な笑顔になる。」(『声無き処に驚雷を聞く』日中出版、81年、P. 126)

高島氏の後半のコメントはさておき、王安憶も、写真で見るとかぎり母親似の骨太で意志の強そうな顔をしており、そこはかたくなくモンゴル民族の生命力を感じさせる。その目は強い眼光を放ち常に対象を見据えているようである。

さて、唐・宋・遼金の漢民族にとっての黄金時代を、自らの先祖にとっては英雄を待ち望み耐えぬく冬の時代であったと描いたときに、彼女は「唐朝」を誇る漢民族のアイデンティティから自らを引き剥していると言えるだろう。そしてモンゴルから一挙に墜落して紹興の墮民に線を引き出すことは、漢民族から疎外され続けた異民族の場に自らを置き、マイノリティとして、支配的価値観から自由な精神の誕生を宣言することでもあろう。

先祖が「墮民」であることを求める紹興へのルーツ探索の旅は、はかばかしい収穫はあがらなかった。「私がこの問題を口にすると、彼らはたちまちしんとなった。：我这问题一出口，他们便一下子静了。」P. 327

人々をたじろがせる「私は墮民である」という近代精神の宣言は、一方で「状元及第」を先祖に持つ者としてプライドを保ち続けた曾外祖母の生き方に共感する伝統精神

と矛盾し、葛藤しつづけることをやめない。

この周縁と中心の葛藤が作品に深まりを与え続ける「空」なのである。このルーツ探索は未完成のままで置かれた。タイム・トンネルはそこで途切れ、モンゴルの輝かしい歴史とその滅亡が語り終えられると、彼女は作家としての自己形成の物語を語り初め、幼時期の記憶が立ち上がったところで物語はメビウスの輪を形成し、筆が置かれるのである。

4、可能世界と現実世界

ここでは言語学者の言葉を借りることにしよう。

つまり言語には時間を「超越」する力がある。／言語の超越性はこれにとどまらない。我々は龍とか鶴とかウルトラマンなど、存在しないものに名前をつけることができるし、「丸い四角」とか「正直な詐欺師」などのような矛盾した表現を作り出す能力を持ち、真っ赤なうそをつくこともできる。／事実、人間が言語を用いて作り出すことができる文は無限であるのだ。(『言語の科学入門』岩波講座「言語の科学」1、P.4～5)

つまり、王安憶の描いた虚構としての歴史も、虚構としての社会も全て中国語による表現可能性を雄弁に語るわけである。ここでは言語による可能世界と、現実世界との垣根が取り払われてしまい、可能世界の方により多くの資料的裏付けが与えられた。それをくつがえすことは不可能であり、かくして作者はしたたかに自らの創造した世界に遷都することになる。しかしそこには危険なエアポケットも存在する。「紀実」と「虚構」は作品の中でなお強い力で反発し続けている。それを一つの物語として強引に編んだ物語の主人公が現在の「書く私」であるならば、王安憶のこれ以降の生涯をこの物語の続篇と位置づけることもできよう。

ともあれ、母の秩序から解放され新たなアイデンティティを獲得した娘は、その後の自由な飛躍の舞台を手に入れ、成熟とゆとりを見せはじめることになる。

舌足らずであり未完成な文章ではあるが、Y=0が不断にとり直される王安憶文学を論じる一つの「場つなぎ」としてのこの稿を終えたい。

¹ 王安憶はこの作品の中では作家としての母親には全く言及しない。茹志鵬の『百合花』(58年)に見られるリリズムが、初期の王安憶の作品に強い影響を及ぼしていることも指摘されるべきことであろう。

¹¹ ルービックキューブは、ハンガリーのエルノー・ルービック教授によって発明された立体パズルです。「空間に於ける自由な可能性」をテーマに創られたこのパズルは、26個のサブキューブを上下、左右と自由に回転させることができ、そのパターンは30億通り以上といわれています(「解説書」。)

光明日報 1998. 4. 21

鲁迅文学奖茅盾文学奖在京颁发

本报北京4月20日讯(记者梁若冰)首届资产新闻杯鲁迅文学奖单项奖、第四届茅盾

文学奖颁奖大会今天在北京人民大会堂举行。

鲁迅文学奖各单项奖是为鼓励中国当代优秀短篇小说、中篇小说、报告文学、诗歌、散文杂文、文学理论评论、文学翻译的创作和写作，推动我国文学事业的发展，经报中央有关部门批准设立的，是由中国作家协会主办的全国性重要文学奖项。本届评选范围为1995至1996年的作品。史铁生著《老屋小记》等6篇作品获优秀短篇小说奖，邓一光著《父亲是个兵》等10篇作品获优秀中篇小说奖，邢军纪、曹岩著《锦州之恋》等15篇(部)作品获优秀报告文学奖，李瑛著《生命是一片叶子》等8部诗集获优秀诗歌奖，何为著《何为散文选集》和林祖基著《微言集》等15部散文杂文集获优秀散文奖，樊骏著《认识老舍》等5篇文章获优秀理论评论奖，杨德豫译《华兹华斯抒情诗选》等5部作

品获优秀文学翻译彩虹奖，冰心著《我的家在哪里》等6部散文集和陈占元等25位翻译家分别获散文和文学翻译荣誉奖。

由中国作家协会主办的茅盾文学奖是根据茅盾生前遗愿而设立的，意在推出和褒奖长篇小说作家和作品，是我国目前长篇小说方面的文学大奖。本届评选范围为1989年至1994年间发表的长篇小说。王火的《战争和人》(一、二、三部)、陈忠实的《白鹿原》(修订本)、刘斯奋的《白门柳》(一、二部)、刘玉民的《骚动之秋》共四部长篇小说获此殊荣。

文化部部长孙家正，中国作协党组书记、副主席翟泰丰等有关方面的领导和获奖作家、评委代表等文化界知名人士500余人参加了今天的颁奖大会。大会由中国作协党组副书记、书记处书记陈昌本主持。